

合經卷第三十二・大正二・二二六下、別譯雜阿含經第六ノ一五・大正二・四一九中)の所説である。そこでは、正法の滅せざる限り像法の世に生ずることはなく、像法の世に生ずるとき正法の滅する旨を説く。そしてその正法の滅は世間に愚人があらわれるときに起るといふ。その愚人とは、「樂行諸惡、欲行諸惡、成就諸惡、非法言法、法言非法、非律言律、律言非律、以相似法」(漢譯雜阿含卷三二)するものである。この文は婆沙論(大正二七・九一七下)にも引用されるが、そこでは、相似法もしくは像法という語は省かれてある。俱舍論(卷二九)がその代表であるが、婆沙(卷一八三)、雜心(卷一〇)など、阿毘曇關係の所説はいずれも、正法をまつから説くのみで、正法に對して像法を説くことがないようであり、またそれと關連して愚人というようなことの反省が見られないのは、注目すべき事柄ではないであろうか。ところが、智度論になると「佛滅度五百年後、像法中衆生愛著佛法、墮著法中、言若諸法皆空如夢如幻何以故有善不善」(卷八八)と的示されるようになる。

この像法中の衆生にして法に著するものは誰かというに、それは「離色法說識、離識法說色」(卷四四)と「聲聞人」(卷六三)であり、「自執其法不知佛」(卷六三)なるものである。佛陀入滅後五百年という一時期を打出して説くところの、かような所説は、明かに部派佛教に對する批判としてあらわれたものといえよう。更に先の阿含の經典に於て愚人は——智度論(卷六三)では狂人——中論の青目註(觀因緣品第一)では「人根轉鈍」なるものとして示される。人根轉鈍にして深く諸法に著し、十二因緣、五陰、十二入、十八界等の決定の相を求めて佛意を知らないもの、更に大乘法中、畢竟空を説くも何の因緣の故に空なるかを知らないで迷えるもの、これが像法中の衆生であるとは、そこに、像法の普及しつつある現實が見つめられているのであり、有自性見に立つ世間愚者の立場が批判せられていくことになる。正法を滅せしめるものは何か、という問いに對する追究が、やがて人間の根機を祖上にのせることとなつた。これは一つの宗教史觀として考察されるべきものをもつているとい

つてよからう。

噫慶の宗學について

佐々木蓮慶

噫慶は京都長覺寺の人、寛永十八年出生(惠空より三歳年長)享保三年七十八歳にて入寂、樹心の社中で初期學寮の講堂取締りを勤めていた。一派最初の法論である越后眞淨寺並に願生寺の安心爭議を處理し、江戸に於て寺社奉行に眞宗安心の要義を説いて心服せしめていた。著書には往生論註聞書、九字十字尊號略辨、安樂集聞講記、彌陀所歸本佛鈔、文類聚鈔聞記等あれども、刊行されているものは九字小字尊號略辨が續眞宗大系に入れられているのみである。

彼の宗學について注意すべき點は、先づその研究方法であつて、彼は祖典の解釋は祖意に従うべきであるという立場を堅持し、末書偏重の傾向を歎き、從來の學者が六要の指南を絶對視したため祖意の隠れた點を列擧して痛烈に破斥している。次に學説について言えば、徹底した信心絶對論で、それは待絶不二の如來觀

と淨土の現實實證論とに現われている。待超不二の如來觀は、證卷の「彌陀如來從_レ如來生示_レ現報應化種々身一也」の語を根據として、六十萬億の如來を始め一切の佛菩薩乃至繪像木像等に至るまで、信の世界に於ては眞實報身であると論じ、十劫久遠の佛についても、信前に赴機の十劫佛があり、信后には十劫に即した久遠の佛があると説いている。又指方立相と自性唯心についても、指方立相は自性唯心に導く方便であるから、指方立相に執して自性唯心を忌避するが如きは佛教の根本義を無視した偏見であると難じ、宗祖が「沈_ニ自性唯心_一」と歎かれたのは、その「沈む」ところであつて、決して自性唯心そのものではないと論斷している。そこで淨土と穢土についても實體論的見方を排して、あくまでも認識論的立場に立ち、「自力の迷心ならば土即ち穢土、清淨の信心ならば土即ち淨土なり」と言つている。かく信による淨土の現實實證を唱えたため、往還二廻向についても還相を彼土の益とするは自力作善を否定するための方便と見做し、往還は自利々他の徳であるから信の一念に法徳とし

て具足するものであると解している。かく彼の學説は一面聖道通相の理談に流れて眞宗独自の教相を亂すが如く見ゆるも、それは有相の執を破するためのものであつて、眞宗の根本義は明確に把握し「古今の人、淨土門は大悲利物の方では勝るが、理談に於ては華天が勝るといふが、彌陀本願の本意は心性を顯すといふより、愚惡の凡夫、佛願を信ずれば願力によりて心性を現わす。故に機功を借らずして速かに心性の理を契う。唯心の彌陀を説かず専ら回願酬報の彌陀を説く、然れども佛願の生起本末を聞いて疑心なき一念は即ち佛の願心故、立處に大乘の極理に契う。實大乘の直ちに心性を談ずると、佛願を聞いて直ちに心性に契うと、事大いに相違す。大乘の極理は彌陀の本願に極まる。是れ頓中の頓たる所以なり」と、明快に論判している點は傾聴に値すると思ふ。

御文にあらはれた『しる』
といふ言葉について

杉平 顛智

『八萬の法藏をしる』といふしる、と

『後世をしる』といふしる、とは、言葉は同じしる、であつても、その意味するところに於ては、明らかな相違がある。

(一) 向ふところの對象がちがふ、(二) 前者は段階的量的な知であるのに對し、後者は二者擇一的質的な知であり、更に、

(三) 前者はある種の知的狀態を指さしてゐるのに對し、後者はある種の知的活動を示してゐる。

『ものをしる』といふしる、と、『一念の信心のいはれをしる』といふしる、との間に於ても、同様な相違がみられる。

(一) 前者の向ふところは個多のものであるが、後者の向ふところは、もの基礎であることであり、(二) 前者が現象的差別を立てるのを目的とするのに對し、後者は主體的根源を把握しようとして企てる。

更にまた、『正覺をなりたまへるいはれをしりたりといふとも』といはれてゐるしる、と、『われらが往生すべきいはれをしらずは』といはれるしる、との間にも、同様な相違がみられる。前者は事實としての事實にのみ向ひ、概念的理解にとどまるが、後者は事實のうちひそむものに向ひ、行動的自覺としてあらは